

K
209.5

デワ

5

出羽太平記

立



出羽太平記卷之五

圖錄

柱上祐黃門景勝公後者至年二十
而義光公の娘在室約二年所余方移居

之年

家康亦率父兄弟列陣陣中而進焉
前日之行止有加藤山形守地集焉



於系山の界和丹師うなるを
御食合せ共國主正兵房光信

禽序方軍評定

K 209.5
5



板上病中因言景福公後者

豐國公圖秀吉公薨去以後而南歸
三歲征途至在弟之禽序の側至上病
日景勝云とあくらまにせば景勝云とあくら
純平ノ譯國の諸大臣を密々と申候
されハ山形下に住むと所モヤリシの如く及
秀賴公をち後の為法國の威士と石集
能事ヲ與ひ名義充多而保方乃

あまくと國事に奉りて正元年正月
思古との上を急いで上房陣にとま
車よりさばは省を下す。後は別入魂
と仕合との上を下す。もや行十をもと述
うれば生身を成るにあらま主ひ勝手
理美義康が城主正元光復横尾平野考
義守と謀りの主義久正嘉毛澤毛佐是
経登也。源氏作木越義守高麗吉村宣

ち先思古節を追徳のへと集め評讎ある
と義守と義先と宣ひともと正元上房陣
墨跡をすくに見ゆる。そのよし。情景
時の正元とおもむかく秀賴公とよし。初女
のよし。とおもて。おもて。奉り。あり。不
よし。の信将と相違。そのよし。おもて。の
トヨタケル。正元年。義康公の御内事と

立候事中山よりおもての原
あはれの世界を想ひ我を抱候不意と企て年
墨猪ふ一味の色をうけひよしよしとす
はるかに極むるに至り往復は度々切換省
考課と名のとくと申されば難度越
年半考課事務を従事せ候際も
一念遙きの事なるを知り一念の景物も教
代民衆の心を算す事一のた爲め候 畜

ふと御罰せんと思ふてのうんばす一人
の是れ候事は少くハ有り。定め雖
否の詫問も一派の事ある事無く上
手と考へ候事候。何事一念の事有り大軍
をもて一かの事もよし草木をも候事
の事皆も之の事有り。石知る事多きの御主
ト長途の跋涉を體得で若狭に見

津松弓はやうに得る有りも難能
あらばほほのすりて。十一、一、
とほん車けひき。味方討負ひが本
途の初和行。ト、内、近、ん、あらか
乃まく居陣、一、坐お向、底をひひ
墨落、一、往々而通る。あ、急見此筆
を、巻展、上、口、口、口、口、口、口、
後墨落、高遠、を、向、行、上、野、山

長谷のあ、跡、か、舟、と、其、船、と、其、
を、送、り、船、り、景、勝、と、修、成、る、と、行、
を、主、ひ、ゆ、な、そ、ば、必、押、る、ゆ、ん、そ、
小、圓、中、一、號、上、號、と、入、正、號、有、此、
北、軍、と、ひ、立、宣、よ、る、と、行、
第、も、主、ひ、名、號、利、と、傳、ゆ、る、事、の、
ゆ、乃、主、ひ、御、と、傳、ゆ、る、事、の、
云、乃、主、ひ、御、と、傳、ゆ、る、事、の、

毛筆の如く此の筆を用ひて書寫
は一筆の墨色を操作する事ある
毛筆 紙扇を拂引ち紙上に筆を落す
筆は右左兼門墨筆企鵠深山虎丸
を透する所ありとぞ。右片用紙
毛筆沙啓と毛筆毛筆。手の代
上毛の仕事と毫細一筆書き。但し墨
毛筆の性と筋毛筆。筆進仕事

毛筆の筆と毛筆と手の筆と筆
毛筆と加替毛筆と毛筆と毛筆と毛筆
四葉柄毛筆と毛筆と毛筆と毛筆と毛筆
毛筆と毛筆と毛筆と毛筆と毛筆と毛筆
毛筆と毛筆と毛筆と毛筆と毛筆と毛筆
毛筆と毛筆と毛筆と毛筆と毛筆と毛筆
毛筆と毛筆と毛筆と毛筆と毛筆と毛筆

因心もとぞひくば歲暮全報除むとま
うせゆかとす年下にばはひじゆきを色都古
の後を多きよしとぞひ一太車の後を
トキトクのバ義充をもとと因心院
重絆をとて候御主臣は西の下とも
え後から正月下仕事もあらば
石原軍陳用事もとその重絆を
あくゆくとお見ゆとあわく仰ぐり候去

年始御詔の年のをこなすと我居る景
勝とて一味とぞ思ひのやくすれども
とほりのやくすれどもくらゝ者やうと
富原の御恩と松井金庫とて一味取
戸今りてたれ病邪在り山形とて
て山積風化れりてふる風雲もん
敵對無事とすと、身の往來ゆくゆくは
因心大殿の下の後は大國為右衛門一毛

恨とゆく所よりはむかしよりの大
歴史初の日服有りては國自爲使節頭
リテ正室威ヨリモ御上者と
遂テ其御子を御内侍御上者と
ハ御の臣即ちを御子セ紀行王と御山
主と指腹の後大閑爲吉子アホ次の
恩人三十人中一姓ニ家門五家を寢
内之義光公の正娘とを也セトガ御大

歴史正室の御内侍御上者と御在
トマリテ是日浦山能彦等と有
れ御の恩人三十人中五家
皆神セテ御用及我始ニ是處を
皆官海難人を経き余あらずと見
あれ故が官居の件も経て御事セトハ
トマリテ宣多生ば秦國舉ゆうと正和を

たるのにはふるをとすにあらわせり
二十三年正月は日暮れにて事あたひ方
百も出で候有て候うてしもくね
八月より六人う當てて入て五日後大
事おほほとほくの事に向ひては
御宿守事ともめたの事に限る
けり。正月に御宿守事の正月後
の事にてまことに御宿守事の三日

物思ひの事居ゆきぬる事の害を止む
と身をすこしもめぐらす事あての事か
多く何事アリまことに御宿守事の
事と申す。御宿守事の身前事付事を
取手をすく捨てて正月の事と申す
事と申す。御宿守事の事と申す
事と申す。御宿守事の事と申す。

君の西宮殿は御坐御御前と、思ひて
御坐をもどす御前御前は心地をよき御前
左近の御座殿は御前御前は心地をよき御前
一篇の忠義あるつとおれ我君の御心腹は
石舟と名あま木永初の御勤乳方角、此
ものぞれ一絶御心腹を重んじて御大死
命を捨身わきがめの御心腹を重んじて御
能く御恩義あると忠義あると忠義あると

人を生む止り生む止り生む止り
中と少翁の事も多々うかうかと
りあらざる義光不傳の事も山伏の
能くやむをもれなきから忠義の傳
信じゆ未だてと能くやむに止りと
うる柳とそよぎと風と誰とも言ふ
うる柳とそよぎと風と誰とも言ふ
うる柳とそよぎと風と誰とも言ふ

仰身にて坐すと腰車をもひゆま
太閤秀吉はまよ下納ケル
宿毛肉向の城カミタケより往く従一門
経上一せ乃年老ヨハシと云ふ一背ヒコ
あま下者アマシナガと長ロクともあらも
次アシモ色と同ソラのニッコモヨシル
も御ミテ馬力通ハラツリシムのる所
之をかくすと高タカ山サンを仰アゲ

腰車ヒコにて坐すの腰車を也れ
あま下者アマシナガと年老ヨハシと云ふ一背ヒコ
アシモ色と同ソラのニッコモヨシル
石臼シロウとおもひて新ハタハタと云ふ一背ヒコ
小舟クモチと云ふの腰車ヒコと云ふ大名
うれ白地シロヒタと云ふの腰車ヒコと云ふ
うれ白地シロヒタと云ふの腰車ヒコと云ふ人

うきのうきよもじは幕府の張の由
を承とちりてあへてゆく。曾
の事に身をまつたる所を廻てやく
伊勢の程をとほりておもひあら集めの
舟船をもじりてはまを花轎とほりよ
行のを詠歌とす。ごあるをもととて乃
ぞう日ひがれをもととて月あらわしとて乃
え幸ふ事なきことよりてはまを花轎と

まじりてはまを花轎とす。いと
の身をまわる情けをもととてはま
車をもととてはまをもととてはま
とととととととととととととととと
あらわしとととととととととととと
さんじゆをもととてはまをもととてはま
いととととととととととととととと
いととととととととととととととと
いととととととととととととととと

尾張三國の在人日程下記す。狼の販
御石尾を山鹿に雪う猿の腹下に片毛
トナセ一はちやの山鹿を賣りて行され
母上を北野の別荘に魚池の娘夫を
テアリニ吉原にて山鹿を賣りて行され
四ノ月ノ内に山鹿を賣りて行され
伊豆の山鹿を賣りて行され
あひとを仰せよからむある世人

の事ありて少の富後山も多と車
輪と車軸と車轂と車上と下の車を引
車を一車を引ト車のありゆみを有
て車軸より車を引く所する所である
推段の段は日本國は船橋三成段
有属の船橋と云ふ一様子の車を
のうりとお車を引けと車を引

とを言ひておれど十知りをばかに思
る。五郎の稚名をもとむすんで、休まざ
のじゆうをゆきぬる事無事は山車より
抱へ立ちてまゝ正経式ののよしの口看
をりとせまくらむれば仙平代也と生長
をもとめくらむるやうに御まゆひ
をもとめくらむるやうに御まゆひ
ツ」と在りていんとはゆてば即上兵

。高弟たかでとも稱のよしのくわち信の義太
刀落おとしだのよしのくわち信の義太
とくよのくわち信の義太とくよのくわち信の義太
眼をあきらめ、正心まことより一力ごんを害
奉毛ほ母上おふくろをもと人間ひとをもと人間ひと
をもと人間ひとをもと人間ひとをもと人間ひと
をもと人間ひとをもと人間ひとをもと人間ひと

教主上院に正院殿と申す
て居ゆるよりもゆく所在地
地のさへの御宿、御しよ
ふ事と申す。と申すわが御はね
正院殿より之を乞ひて行
て申す。御宿を出る
害一はまこと一あはは上院の方
あいの正院殿大納言殿の姫を

主
十日あめの日は正院殿
便
也申さる。正院上大納言
正院殿よりあらゆる所を北政所
正院を申す。と申すてよる
ナモ行主と申す。ハ行
石叶と申すと附る。年を

石ノ木の山の下の川に水を
まよひてくらきあれが身か
筋力半減すかの心内高揚す
至なげ厚めりすまじい而
はるかに心をもつての事
うわきあふじきアラホ
ハシキトキ一報すモ一世のち
とほせど頼む一佛の正慈也

後世の蓮の徳と承り矣
角のすゝみをひひのせと後の
宿をもとばに車を右也内船と
そと思ひ一旅を終て山と山腹
の奥へのくわく御じと書ひ
たゞて山ふね作はばせ

とお絶じて付与す。よりはとくま
うきよあつてかむるがゆゑのひ
ひそひ年をもとしにあらせんあゆ
えをほを我をも害へし。ひくとも太刀
原のゆゑ原をもとし。ヤセモロ開
外年(おとこ)年(おとこ)時(とき)の危(あや)めりやをもとと伸
れぬよ思(おも)ひを取(と)り。活(うき)ましれ。種(たね)
穀(こ)穀(こ)をもとととととととととととととととととととととと

て送(おとし)ゆきをばくす。とゆ
は店(みせ)の力(ちから)をもととよま
ねとと管(くわん)へ。と七(しち)日(ひ)と見(み)る
が大(おほ)き敵(てき)北(きた)のよ(よ)と呼(よ)ま
はるが一(いっ)絶(ぜつ)大(だい)牛(うし)耕(うしな)み中(なか)田(た)
水(みず)とよ(よ)と。水(みず)とよ(よ)と。水(みず)
田(た)とよ(よ)と。水(みず)とよ(よ)と。水(みず)

猪ののりを拂ひて、おなじく、
手のなかの丸をほすと、はなづけ
はるかに、かわいがれし日
や、うつむかへて、あやしく、頬
をかげける、人をうそらめし。
そぞとぞかく、くわづけぬ道
の窓戸の隣、今一反、よすがす。
天の御影をうまれて、まも原をさ

信よし。年少すよ。頬と、うる
きよ。体へ泥を落さずして、を
すきよ。うれしきよ。まだ、正月、
仰。後世、善く、ゆきよ。ひきよ。や
うきよ。れきよ。まきよ。猪ののりよ。
手のなかの丸をほすと、おなじく、
はなづけ

うにむかひ行ひゆまはくと
そよきよしむかへる木のぬい
ぬくまじめかかへる木のぬい
そよきたまくまくまくまくまくまく
そよきよしめのあせしゆまくまく
そよきよしめのあせしゆまくまく
そよきよしめのあせしゆまくまく
そよきよしめのあせしゆまくまく
そよきよしめのあせしゆまくまく
そよきよしめのあせしゆまくまく

そよきよしめのあせしゆまくまく
そよきよしめのあせしゆまくまく
そよきよしめのあせしゆまくまく
そよきよしめのあせしゆまくまく
そよきよしめのあせしゆまくまく
そよきよしめのあせしゆまくまく

柳色はるはるはるはるはるはる
桜色はるはるはるはるはるはる
の五首を二作とてかく御一の

絶句の五首を二作とてかく御一の

うきよしめのあせしゆまくまく
うきよしめのあせしゆまくまく

仕ゆまくまくはるはるはるはるはる
仕ゆまくまくはるはるはるはるはる

眉首和鷦鷯いとまくまくまくまくまく

局龜曰和モヤセト。賀尼の母トモア
妹のモト原の母の娘トモアトモア
は年老ヒテアリトモアトモアトモア
モウタシレバ石原曰龜也曰和
徳一の事也。曰是かトモア
の事也。曰是かトモアトモア
曰和モヤセトモアトモアトモア
トモア曰辭也

ももつ活龍のまやあらはと原
たもがすへりうかの身を
もむじゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
栗世界の敵至所圓定席ト一念
せえあらわらわらわらわら
仙千代モの上日比野下北守り娘也
うのうりうりうりうりうりうりうり
うりうりうりうりうりうりうりうり

四乳體を抱き水晶の陣ねとちまく
じぞくとくのやとのは鏡きみにづく
着衣の笠冠の形勢一毛うさぎの事
ひもは村のまことうござりとすのを
ひれあまゆの腰ゆゑももく用にて
うきぬの自庵と人年八十歳
持手すかのめ縫く圓扇を拂く
毛

のちせせとうて一海より其
船をとれりふるの山宿
あるは市右衛門の上十九罪を取
尾長の木の原人山石をうち娘白井家
と妻原の木上高麗の正元駕を懸
抱きにの傳りも傳わるをも
自ら尾上人にはあくまで金を立てん
廻向

喜々乎心の内に身を出さむ
ひきうるゝはるかのとん
とゆト雨もどく金華へあ眼と
ゆふまほ祖^{おやぢ}を一^いにすむと乃
しゆくまに口角をお彌^ミヒト六萬^{六萬}は
ほつらむとせ一^い善^{ぜん}の身よそり
ら生^{おき}白蘿草^{しらのくさ}の葉際^{はば}の新^{しん}芽^めも
うかく^{うかく}とひゆ^{ひゆ}と古^古禪^{ぢん}

鶴^{つる}傳^{つる}と正^{ただ}もあくた^{あくた}と^と節^{せつ}學^{がく}
と^と鶴^{つる}傳^{つる}と正^{ただ}もあくた^{あくた}と^と節^{せつ}學^{がく}
と^と鶴^{つる}傳^{つる}と正^{ただ}もあくた^{あくた}と^と節^{せつ}學^{がく}
と^と鶴^{つる}傳^{つる}と正^{ただ}もあくた^{あくた}と^と節^{せつ}學^{がく}
と^と鶴^{つる}傳^{つる}と正^{ただ}もあくた^{あくた}と^と節^{せつ}學^{がく}
七者^{しちしゃ}まほ十九の身上北壁^{じょうじょう}に宿^{しゆく}居^ゐす

娘の手足をよしと親むれど
口笛を笛一吹いて後悔す夜の
よしと一吹くつともゆづらふまくゆく
しめくわら夜をわすれたゞをいふ
とほを待てとおはむの降ねと
くうとくはりゆすをゆく
口笛番門呂と管笛と入居殿主と
看守の名前をの海生看所とお稱す

廻向一曲の後

一毛一糸よた急^大懸のつるきのむ
うれぬ月のひのひくよしに
八番^はよしは國の住人住みのえ難尼
吉七^{よしち}う宿すゆかとせやまくは
の上^{じゆ}長^{じゆ}とをさへに善^{ぜん}教^{きょう}を教^{きょう}す
切^きりいゆゑとおはくと白^{しら}髪^{がつ}引^ひ
もくはくと秋の光^{こう}つともうきよ葉

うらげのうひのじよ、お
おとをわすれども思はる事あるな
のむかしのあくびのゆ
アリ國をぐるめ
おとづれが是も上への手をも
ひまくわざが實体へ進むを
進みるをあくびの通體
うきの通へ全體の上に於くの

輝
おとづれの首を抱きやせぬ
おとづれの身を危惧のまの怪人
壁に落葉落葉が落ちてあらぬ落葉
おとづれの落葉を扇お風かねて
おとづれをもよおしてお風向く
ゆう

おとづれは街の手て道の狭い
おとづれは

かくの御事と云ふ事は
止まつてゐる。四十歳、在りての間
モヤセと云ふ事形相をもあつてゐ
る。意地づく事あつてゐる。
無住無住後宿よりの宿泊は行
きやうともとある。此の宿泊は行
きやうともとある。此の宿泊は行
きやうともとある。此の宿泊は行
きやうともとある。

之無ゆ多度起る。足
一着、山中出でるのと、のび
宿上本役守殿の山根、やうて、
ほんのりと見ゆる。其の山根は、
守一の義、す。ゆる。其の山根は、
作せらる。春月、よ。やうて、
至り。そらきしゆが、のる。諸君
多くは、山根を守る。

は事半功倍の如きを仰るに至
る。其の如きを解説する所が
は、従の日本は、何處かの如き
事と並んで、太國も新設止
め思ひがん所が今後如何也
諒念下に尼佐原主方と仰る事
は、主方の如きが、尼佐原主方と仰る事

おもむくにあらわすもの記の所とある
事一回りを一回り走る事
計りをせしものとれども
もゆくがゆきうかれりと初からうる
よのと宿屋の宿す流石もんじや
かと辭世の事

此等を以て太閤御國

ノ事より日本をシテ内腹をも

シテ高麗の邊に之れを爲す事
修ム松根とし木の根アリキ
の木根を皆木の木、氣の離
ミ事無事、氣の離事無事
ハシタリ、東洋に之れ、あまんて時
きのはてあまんては月の花

の在酒宴の如くもは

は盡るおまじまに遙遠を思

石生月、さみの月、おうづ、さりも

年少の月、空を看る月

遂遂ある月、月の月、月の月

ゆゑとゆゑの月、月の月

空の月、月の月、月の月

カミ十二番目より又辯世の音

通陀はさうのもとおもとあらわ

ゆきをしりてゆきすよひあるま

十三番目は少将船速尼前まかに星宿

の船速尼の人にもあ次姓事と申

うい人まんじくはるひ星宿の事

くまきとまこと辯世の音

ちきくはねむる辯世と云ふ

ヨリ一脉を承りてすくまこと
十四番目左臣のありすの辛子御室
辛子と左臣の辯室すすい父左肩
の園主妻の櫻井とすくまことの
をもじだやまくまこと左の
ゆくまことのゆくまこと左の
聲を聞こまて源氏おほ船宿と申
ゆくまことのゆくまこと左の

高麗の所より元寇をもてまづ

ゆき

あそこのうじせんはるはる
はるはるうらのゆのゆくとく
たるる在鳥の民庶とくとく
村井農業とくとくとくとく
セアヤウミ村種田とくとく
室はくやせーが家能とくとくとく

山林をむかひはるはるはる
まくまくはるはるはる
まくまくはるはるはる
まくまくはるはるはる

山林をむかひはるはるはる
まくまくはるはるはる
まくまくはるはるはる
まくまくはるはるはる

てけりと十ニ萬石に妙ひあり難女
をもあはれの西風に意ふ不心益庵走
三人の回憶あり。一は花、二はまな
まことの風と紅葉せんじとまつわる
まゆ、三はさくら山和歌山の山川
仕合の風と月と夜と春と秋と夏と秋と
まゆの紅葉の西風とよしよ
めのゆきと絆りぬるはな

おとづれ人ともう西風月の
すずめを思ひ出でて山の月の
お袖を思ひ出でて人との会
重いとてつづきとお佛と奉りの心
七度の歌を一とてうれり。十七
廿五枚や坐布十三枚すれども古
一ノ屋敷の正旗を一とてうれり。廿五
作れども古事記の

相圖はす。とて御多聞の有日。よし
きの御事。うるせり。ひきよし。根を
の木を石あげ。年是高生。ま
まじにばくよ。内侍。ゆく。見
えんぞ。すみ。こやく。山原。もく。て
命。むかう。ゆきと。ヤムセ。の。と。山也
一。ゆきと。ゆ。一。は。御。山。の。山。御。世
和。と。ノ。無。ま。れ。見。か。ね。ま。る。

133
かく。す。く。ひ。す。く。く。氣。拂。や。す。
口。舌。の。の。く。く。口。舌。の。の。く。く。
アリ。ナ。の。舌。を。松。氣。石。も。も。麻。の。木
伊。丹。の。向。事。と。ア。ト。の。猿。十。石。も。木。
モ。モ。モ。モ。モ。モ。モ。モ。モ。モ。モ。モ。
き。高。山。の。山。山。山。山。山。山。山。山。山。山。

まほくは十日とてのやうのばらの
うわきをあらわすあづまやをね
のちびとみゆ

形見すらまきまくらの
より本命をねまへせん
たるうつて生産の國の住人
伴内市右衛門、源助、十左衛門もよ
うとくわくみさき

有りて、傷やれあるかを
とくがづきのよ前トモ御カタの主
あらゆるうふ傳ハシりトモう
うめ出力道風の口首カヒのあらゆ
るを、おんじゆの
ことかくのうの

白

了

とくに年少の仕事は、ひきこもる事無く、
門徒を仰ぎ、せんとくの如きを失ふ
なくなり、その名前は、西園寺宮殿也
と號する。あらゆる國を止む事無し、
二十歳で松林寺和とて十二歳ちう舊
門徒の浪士として知り、其の後は、
肥後守と號す。其の後も、うづ、佐渡、
あま、筑後守などと號す。其の後は、
江崎の宿主。

とくに高き世上の足跡を尋ねてから、
天の川を渡り、月の島を経て、
ゆかりの有る御所を巡り、
とくに南都、京都、高麗、日本、八國、
次第に、その筋度中特候の所を
往びる。また、その間の事は、
やせ様のまゝ、未だ記さない。

お前うちの西風船の事は如何
トもれ候全般に於てより承り候るは
えどんがくらむとては御心事
口宣上げりと申せられたりとも
國自古以來の御心事に有るを
歎詠

お前うちの西風船の事は如何
ゆゑてかと申せられたり

と迦陵がんうの聲すこしきを失ハ
正和の西風船の事は如何
きやくまおは西風船の事は如何
は情あつて申せられても後も何と申せ
じよりりと申せられても後も何と申せ
正和の西風船の事は如何

す

正和の西風船の事は如何

アンドラソンのはのへ
車を多く附の前後輪えんと車を被
へる處の内側法兼邊輪へんの外を
もよおさうと男おとこを女めのをかぶらば
を車の前方十カ葉を車の後人
生枝桟じやくさんとソトの娘むすめをやがて
石をもよおさうと車の前輪まへ
織物おりものの車くるまを車くるまの車くるま

13. 宮女の車くるま四の年とし在
月つきもいひ度ときをもすと車くるま
後世ごせいの車くるまをりもあらずと
ありとが難ひじのびて大車おほくるま貞
房わらわの車くるまを十念迴ひ向むけ
かくとよみゆき

13. 織機と車くるまの紀有きゆうと車くるま
みののとよみゆきの紀有きゆうと車くるま

乃三番とたる所あるを知れどもす
本村常陸ちかのりせひよ多房とよ人合
もくもくもくらへしとく事の實じゆ
もくもくもくらへしとく事の實じゆ
辭世の歌ことわざりふりふりの歌うた

アドレサス
差とのことかくはくまほく
アカシヤハラ
行と辭世の事じ

古四番とたる所あるを知れどもす
てのもの極いぢめ成りあぐひの事
うちおにゆきがばくよくらきとく
じくはくひくはくはくはくはくはくはく
よせのじくはくはくはくはくはくはくはく

アドレサス

おもは佛のまことをうながす

おもあへらひてかとおもふが
といふのねどもけんじて江戸經
信者ゆゑに金の口経と鶴傳えんじとを
人間じんげんかくまわせりが富原

羊ようもあともうれし成佛せいぶつとおもひ

多かうのめぐらしきゆ

尼きみも畜くい大座だいざの御宇みやこ、始はじ坐ざ年とし廿さん
三さんも才さい十じ金きん銭せんの口経くごうの口くちがよきと信者しんしゃ
主しゅもそく觀くわんる

おもほり佛ぶつの尼きみをうそひ
尼きみもすましゆうとくをまこと

せむ者せむしゃは松真木まつまきの口くちがよしと信者しんしゃ
ゆく本ほん風ふう年とし二十じ歳さいをもる

上じょうの事こと年とし二十じ歳さいをもる

御身から年を名前を

之に付く所の事の生れるる

年々之を以て之を爲たる事

其ノ事に於ては、其の如きの事は大爲少く御存矣

「山」の唐草書

卷之三

卷之二十一

卷之三

後漢書卷之二十一

本末無事西行の爲めにあつて此處の事
内々天皇御奉公の爲めにあつて此處の事

切身の事大内為政は既に死がたる所は
有是故か此處愛りし者一いつて居れ

をひきくまゝにひまむすびをひきしる
あくまのゆをもとほのせをひくがく
わたりはれみりては世をひとひもと
れひはつみが叶ひと今是處の所
ひよかとよかとあひをもと
まくわく引ひゆく御やめ
ちくわくひふるの山
手着わきあひてはほのく

一
佛乃少多暇宿
世一番事中お詫
女房と飯を食ひ
翁第一に老の所
アモ身を支え難ゆ
三日後相手に自害一罪
乞うるを以て世話を

二
六

豈れども出来の事也あらず
ちがひ事也あらん事もあらぬ
さうと云はれてゐるゆゑ
人を多く見聞せびらか
のつゝむる事は必ず命令を
する事を以て仕事の仕方と
云ふ事とすが、其の仕事は
の上部をかきこむ事と
かくはす事とす

御内侍。トトロ比屋次郎四郎。元治四年八月一日年
①朝より申の刻アリ。主に件本の事多切
えり。トトロ引出ノ一品食と付。此を
大に心も元を一ツ取。トトロ是れノ年
是と引シテ。トトロ根入。トトロ相馬の御
や冥途。トトロ福魔王の御事と傳。森
阿修羅刑。トトロ罪。トトロ集め。阿修羅
トトロ。トトロはすまぬ。トトロ

アリハ肝を浦 魂をモルムニ
ノミの上を走る橋ニ一宿に高麗風と鳥

主の城を敵ありましのを害ふる者たれ

ヨリテシトモカ勝けりとてモサヌ事車

の内に此の秀以入道風大夢達の人

チキバセニ通じて日本也モアシ

人々の年々の経年もあゆみの色あや

羅りあすゆる事と改め生氣

聖ひだりきとも男が不吉を御す事
モリカシシ命と云ふたる事は皆是
あくの正體を思ひわざりと傳て
を石をとて作よと而せりゆるのち
石をもててはづのうの根歎所除
主を歎せりかねや難と傳てはる
よりてはく死骸の如きを而せり

御朱印御朱印一通手書手書又御筆御筆手書き

少く脇の後後に立上立上へんば義光を書

紫紺の属属せひものアビヒ狗狗

二三日ハ食食る事事もなき無記記ありて只

御院御院にゆひ食食る危危くよ危くよの事

うれび根根の事事の事事ハ内内青霞

主主とて阿阿の和和洋洋たる事事を爲爲わ

多多くうち様様もあ種種を連連山形

家康公の御事御事を一歲一歲ニテキキ有有大大河河

毛毛とうとう太太皇皇タキタキ多多湯湯船船内内有有大大河河

志村修善修善と佐野佐野一歲一歲因因修善修善

進上進上有有印印

家康公御事御事を一歲一歲ナリ御事御事

印旛情

元和九年正月

義光云ト有りて、私心思ひ見る文紙

辛卯十月日更刻ごたまへ、圓向爲御佛生

陳の如、富原心也傳つらひと仰下有者

タモ、内義光云のニ男方鳥取と傳つらひる者を

タモ、四年の清江久不廢わきて、而名二

男居る間まと、年上在宅ざいじやく、即、櫻井三

れ御名無因作なま、而此後こは、

定じょう、御名無因作なま、而此後こは、

富原心也

うつ

家康公勅別所陣上御進奉

一
事

五種の山形は妙師、鳥取大坂、郡守
景勝祐道の、佐野上より之を
家康の間にはじめに近付方の如
慶長六年六月廿一日の詔をおもひた
伏見の白井町にておもむろの事務
内閣本居院に五年正月に於て五店の相
伊佐多隈くわ作相國有田の口と曰ふ
アセモ内裏の事と申すが海從の人の
義夫より其の事と申すと云ふが相國
ナホと直角の事と申すと云ふ。○
里　　家康の江戸城と申す者有
國吉野の野州山四つ御室と申す者有
水の御室作相右京吉義官の事
酒の御室と住者と申す者有

治をもとめに評議一擧一トモモトモ不當
詔詔か浦之國被逐至龜島之佐木石一
時をす。既て休身于海の所とぞ
以更國のアマ馬七日當四日の所とぞ
船の處とし、山と山と被逐至國
舍屋敷、天崎掌相正宗云官上中将義
光云、主作舟佐藤掌相秀平承云、
山主御主内、扇原云秀忠云

今度は金庫事に近づくに随分追
在一同の心地も良きものと可
有る旨作成せしを以て是宜
ヤマニキ全く承取可。承取公請請
權者本邦の臣民の肩を負ひ至る。今度は仰
名向の先を肯卯年難免なり。即ち奉
手拂拂れども其水害甚しき事に押立
出立す。今度は御臺向の事。事務は

うちの山徒を正補羽と同廿八日出を
立て此處取引ト
御父一月

は城入セヨ

生駒陰奥ニ諸古跡如磐山形
馳集車

志列官房御傳より山形の馬事書方
十三日ニ山形ト下野トモレ御事本付御用達

ヨリシテ志方陣表の事より御思付の

直印懇タカヒ
如若トモレ御傳より山形の馬事書方
有りム内内御傳より山形の馬事書方
條軍の詳識よもよホ今事付日もも
札入テ付ル 家康去御事あらば御
進奉あらゆまく有仰下され候義光空
也此の者と云ひ軍の件足一事も
實隠乳の事し

遂りに主事内日を以て子房の

佐將山船と駄馬を參入し御作

一着、南神作官手卒騎とて號す

二着、杜國左馬御手卒騎とて號す

着小产、足利御手卒御手卒騎とて號す

右田原御口首兼濟又番士御公府

正三面、金邊赤毛旗、御二百金騎加保

着、御手卒金邊旗、御形御手卒旗

張四郎六牛清岩在焉早金邊御人合
兵隊一百千六百支馬、御手馬一百
人、一ツ所より軍隊定、お寫メ、内臣
家康云トの一味同心全く遣、若方家
連利起信、あまくとく義光公の
名前あると、吉連利の聲あり、此起信大矣
其後義光宣ひまち京に下すと、
攻入する勢も強し難か、生倉を防ぎ城

不寧易く彼のまほらに軍の仰せ
す處、山形より西上をすと見て、
國中一礼より高津はの金錢、事方と
利運と御身と宣ひとて、が名はるも
えの五名代とて、端の修理を失
くして、と御身とすと、美原には、義
康忠大將とて、六千五百騎ある。信
昌忠大將の子将なり。北野山と有

陣を立候。御身をレヨモと號する
如く、青木と高津御少輔元成正親
遂、國の諸大臣のうち、からまく御
体見方陣の地、既にからゆたか馬は
えじ生草木とされ、 家康公節文字
も、秀忠の亂達をお詫小山より、
御上庄脇の有能の早ち松の園
引ひて、加藤の清將も、勝手の園

おやくの御事あつて御内をかね
留められ候て一味のものかと解釈を
するゆゑも一言お尋ねと申候る
と御懇惔の納あ良原は生身
在てのうなづかしと義光会おたる
御身ともぞお坐りと御内御のひら
まよゆす百姓能處候る滿足作成
御事あら夷國里見御内御身に寄り是

笑ひ急れ義光の口をもとて爲
替は仕将上者との障記の口をもとて
面の脣内より退ひて口の筋度を
もとめたれ連列の口へ寄り、一左
右もとく起債文を被り口内一ゆき
家康が御年よりの御事あら夷
方並びに島あら夷の御内行先

と向ひの日暮が下船し御殿を
並ひゆす御の通す御門より行
の用に立候を是處にて御前は
坐めんとせし同士軍といふ一組附
ハ船と空と霞の上に一元是士軍
の事のゆゑに御門の傍を
敵一味の半生半死と計りま
ま面白の眼の見る所なり

老りば年事すむすみあが一念
家康を奉じて身よしたの心
の如きを猶ありに謀り少
舟行不可歟とやまと之衆を身若
可思少しおもへぬるを以て之を
去年のうち一ツひとと一ツせんと
ニ也くもくと暮す日暮れに従ふ
素をもつて船を思ひて一筋の心を

一命をうんと費ひあり、一身の是
恒より多くめ所が大都すよはゆ
石見に在りて、程ゆゑとて官
名を以て里の内に號ひるるを
家本與氣をさへうれぬ時もくわく
卒尔加る事無く、印ある者を

と退生をきらむを

於兼山園丹野の地

古時松鶴之筆

丹野は其の名所としての風氣の
も神主廟延跡附る山の奥竹と
鶴竹をもつて、國元老の者
又すれど此度下品な御の仕方石泉
入りて通じて、國の本戸を置くわ
住居を有する下品の住居

國をも窓を開ひ急に通す。すの
有やまくさんどもあらぬ事す。事あるは
紫霞山形、加藤と云ふ。
伊下組より山形属と申すが、
より敵の轍をよづて、
引取れども上松坂口一里を走る所
義光平井の下下組の下町もそい道を
引よみ卒急と申す。怪しきのれども

は首を山形と申す事なる。事あるは
あらぬ事、野陣と申す事ある。事あるは
ともあれ、巴急と申す事ある。事あるは
人を馬車の件正事ありしもとほんと
アリふ事、布戸よりアリスル事、原の意を
役高棟のう後花名を申す事ある。事あるは
え先もさうと申す事ある。事あるは
あらぬ事、山峯の事ある。

空處けあらわはるゝ事には曾
者故に絶えず事と候。ハ居立
ト本居を除くとおらずにや
くもあらん。而うねをかくれば
と張ります。この事は多
のあらゆる事にあつてはあくまでも
多くはちへられうるやく防ぐ事務
されどアリ事のアリありとくの
様を嘗ては、
やの色を倡前と踏破して居る事
多くは僻くそき事は卒忽ちる事も
ちびれ、奥さんといふ事も血手
仕合せり。上杉殿一味の事とゆて
省と着用するよりは、
多角形なり。船形なり。あらゆる
所のド卒尔をも身に付けて

竹をくさりて山形の傍を走日の中を
走ゆ。車を引ひて道を走る者と同所
に外りてあらわる處を走る。車を引
の車とひきし車とある。車を引
立本山前より其處新しく其處を有すを
あらわす。この當時は日本國の御事
花車もよき監督の佛や妙聲の人

長財立す。身中の体と足の源の種
同の脚立。強面と五丁の桙枝木の
脚と脇弛のアシキナカニを括りける
仰き立てまほの山立す。ふる體と
足と一立本山の向性を解く本のね
後日と置く。右御室のあくの後
女童す。そりておもむきをあひ
腰巻をまきをあひてお腹の間く傳

主ひもとて太樓の關 武志山の本庄の要害
小笠の三船手と見ゆるを興味とす
御室の第三神妙ととて能く承り
後日、山形上りてそれより義光を差す
山側の佐將らともお膳席も侍奉
アレヤの太樓と老ノの角ツ江代兼
にと一日一夜うち蜀主の御湯のみ
而ドリ拔擢ひとどり半拂やと拂ひのひ

主ひもとて太樓の關 武志山の本庄の要害
小笠の三船手と見ゆるを興味とす
御室の第三神妙ととて能く承り
後日、山形上りてそれより義光を差す
山側の佐將らともお膳席も侍奉
アレヤの太樓と老ノの角ツ江代兼
にと一日一夜うち蜀主の御湯のみ
而ドリ拔擢ひとどり半拂やと拂ひのひ

先帝討死事

相合金義井博主江里主房

上杉薦
景勝云は宮上生根守義光
手は一味りもあらず
西山重久
四歳とて内侍の御子をうなぎひの
外
家原公仰
味方兵威を節度
祐將加藤と
山形、秋葉集
佐久
治日より亂入の
事無く
あまく
水ゆきは
よしと
あまく
水ゆきは
よしと
家の事
帝等石集
多の事
義光
か

通る事
道の筋をと
英國の信濃守
吉良勝高尾
うるまの内
事あらじ
しと
一防ぐ在
事あらじ
事あらじ
事あらじ
事あらじ
事あらじ
金圓の福太翁一味
す
松一十二年
而て仲間大澤のを承
政安年成を
の由に進むる

野川小山の陣下を立とおる若年少
家康公文をよしとて、この事のアリま
まく、河山船をもとめ、一連の船搭の往復。
上吉の陣退、船を西の水城に引退の
トヤ、舟をうきて、日もあらず、利と得
きと見えて、さりとて、船と舞ふ事。
島主船中より、義光公が退作
軍の首連様んと、也、山城の看守

内上泉主水頭松原常陸守美濃守
と一と出羽小山船前、押木をすこして
出羽の後方船長く連き、山あ
城と、もと宮迫、向、追、うちもと
原、船をもとめ、にのむのり、山城
往く、東のとみか、原倉山と、珠を
是れりと、山の北の奥の御山、御山

山下への道をひくの山筋と曰ひて往
居候るが山筋を城主古義光は
舊の時江戸を守護して血脈接
重きを以ての猪木をかねてのまう一
ヒトニ魚を奉り人の割合を不相
ひと則りのものもとあるとも猪木と山筋
を有する二男小吉を名の猪木和田良信
を立て立て立て立て立て立て立て立て立て

義光公率麾下作
事一舉也無所失無所失
者有之也。後不復有小憾
大勢已得。切忌妄取。率
皆可。不喜者而假其意。一
山形、平野、一舟之任。一
光清派。之。雖至正從事。若
須掌。一。三。乃。有。也。能。

傳内侍
山見とては事事
御軍

内侍の事とては事事
御軍

引継ぎて御内侍と義光公の仰

鳥山山形の高麗に車騎

臣我おも既に事事と也山形に

高麗の義光公を敵攻する事事と

あゆみ御内侍者を事事と也山形に

高山多大の事事と也山形に

地高所に欲其處を事事と也山形に

山形の事事と也山形に再び往者を事事と也山形に

えども五兵衛と信曾

門の事事と也山形に

と我おも信曾思石田石舟所の事事と也山形に

事事と也山形に

内侍の城と稱す事事と也山形に

上りてはあらわすへ思ひを相抱する
頃に攝摩の在里在處に江祀の事
日野伊賀守とては是れ而後
中原の鳥居相合ひて多事ありて有る
諸祀三百社有り張挂して能く全
百金騎坐しては江口の店先に腰掛ける
居者ありては其の前よりはててはてて
立山形の事とてはててはててはてて

妻子と名舉て居セ一は恩は附く事に
ハシテ送り主と申す山口より是を
今古傳世を以て命を極め下は成
大勢と云ふ事付記して武士の節を
と車の御先と云ひて御寄と申すと政局
送り主と云ひんば少くもあ
されど云ひんば少くもあ
同い事の役軍一と信おどせば中有

の義と是よりうかがひ一つのあはれを
もつゝと猶と要害をそよそよ掩へる
種の御を盾へひびき乍年の左肩
直に山城守の色部守理毛と名を定
春日左近前村延國と坐推程序七
席上泉と五度を経て移居至る
嘉慶長五年九月十四日方城守山形守
押持を當りて石毛をき縣はの事と申れ

も御中止移却するを以てす
其處にあつ特相ひ猶自ら之を參る
と喜び上ち眼を眞徳^{ハラミ}と申す
石舟と一齊に開放されんと有記を
あるの事より高井是を詔勅^{スルシテ}と傳
山崩^{ハラミ}の如く其處の櫓^{タム}と降
りて其處の門^{ハラミ}に立てて射^{スル}事
多は據^{ハハ}の社^{ハハ}の山^{ハハ}の如^{ハハ}而電色^{ハハ}の如^{ハハ}

裕紀とあらわれが未^{ハヤシ}度^{ハヤシ}に往^カ
久^{ハヤシ}き^{ハヤシ}の事^{ハヤシ}を^{ハヤシ}事^{ハヤシ}を^{ハヤシ}見^カ
陸^{ハヤシ}体^{ハヤシ}石^{ハヤシ}と^{ハヤシ}各^{ハヤシ}の^{ハヤシ}所^{ハヤシ}を^{ハヤシ}見^カ
ガアレ程^{ハヤシ}の^{ハヤシ}木^{ハヤシ}を^{ハヤシ}附^カき^{ハヤシ}有^{ハヤシ}る^{ハヤシ}事^{ハヤシ}を^{ハヤシ}見^カ
えど^{ハヤシ}操^{ハヤシ}を^{ハヤシ}十^{ハヤシ}新^{ハヤシ}く^{ハヤシ}と^{ハヤシ}い^{ハヤシ}う^{ハヤシ}を^{ハヤシ}見^カ
至^{ハヤシ}素^{ハヤシ}體^{ハヤシ}虎^{ハヤシ}と^{ハヤシ}昂^{ハヤシ}り^{ハヤシ}山^{ハヤシ}形^{ハヤシ}、^{ハヤシ}攻^{ハヤシ}力^{ハヤシ}と^{ハヤシ}有^{ハヤシ}る^{ハヤシ}を^{ハヤシ}見^カ
右^{ハヤシ}の^{ハヤシ}手^{ハヤシ}小^{ハヤシ}物^{ハヤシ}と^{ハヤシ}と^{ハヤシ}備^{ハヤシ}し^{ハヤシ}ま^{ハヤシ}

名前ある角のことをいへどもりく軍の行
窮んとやうてあらゆる種類の馬をもたらす
左近は大軍とすむひる。軍のからだをま
玉をぬるけの外、みゆきの乗馬を
義光は後佐のさんをさへ在り
おまきの間と曰あらば、内閣にそん
まくね。帝が御廻を角りたりと
生立派の後佐の軍馬をかくの

軍とお員とくの城中の軍を身にまく
つるのと進さんとお経修はれはお立
たまふ出ぬものには時よりとくらむ
左近の御腰色を人びはらはせん
末代の角と雪とがさげり。傷ち
立たんと東南南北と左近と御
腰腰亮と左近の門を素と左近山腰
左近と政と西山の門を素と左近山腰

145
招福と吉慶ともまじ行本の振巻と
さめじて、内に廣角と云ふ。此
の御石と表上の一鳥と様遺す。後無む
と佛とおけゆきと引くは
只やは跡に既底みれんと思ひ
え年年元清々寧御とて古佛と佛
御はくと年も一石を御置か
不石年年とて、がりゆきとばくとれど

死とまよのねをあげ寄るの兵旗も
見お松山の御と年も經とりと年もあれ
左今日少た勢うれりのと便よ有
無阿彌佛とくと佛をなんとくと
きんとくとくの軍の軍とくとく江口
多魚光清、は武略あるのと今と有
歌の捨とくとくの軍の軍とくとく江口
りとくとくの軍の軍とくとくの軍とくとく

ハヨリの人の件御事専責にて付負
れバ人情より西國よりひしもべ
明月ノ下生子は破さわらりあがむを兼
有もつる者處ところの傳つたて行ゆきの事こと
あん所ところは實じつを存そね
しが居ゐるのの明月めいげつより
今夜よののおとこ様さまとスワレ合
ふれまくらまくはくとく年としを

卷之三

是を身に櫛の寫中間は省略する所も
多くて射立を兼ねて解説する所休
り修程も是を練習ゆる人の起ら
る事無く、一矢不記生ハ吉と極
あり付する所互の運と進む事

まくらゆる報耶に射まつてゐる
てて面す難い我をと改めば尚
天魔をうそあるまへてとは云ふを
去とも光清は死んで山室の加美
島もくも猶豫せば生まつて能作
毛感の涙を落す者や一仰貴
也の衣冠の小切筋甲と猪首
當おなづけの三尺一寸の左角を佩往雅也
當おなづけの三尺一寸の左角を佩往雅也

と涙の上にあらじ見度方字をあ
降り一見多才十文書の達性機敏の
中と面をぬけたる寒々入二重小者表秀
物の墨作清直と初どと一家の名跡か
をもひくもまことかとゆきゆきの事
と前り稱と刻本西向ゆく入道ひれ
あく一拳を手取ひ叫びて改姓し
やまも進むるの誓はるい序易

持稍ひ猪松捨一か月後と同日
貞元へのゆきの河原の石の
之處の古傳古山城ちゝ今もよ後
あぐんとあるアリの事て寛永のより社
ありと云はば佐代の事と云ふが、城の
東を川倉山のや跡と同の下に
重電のとくを種と不居さん
射多とれが據り猪松等の事

可喜御子く今はすま見トロ城
の兵を據る城主をやく、我を主と爲
りて有り、是を主とゆて、又四方を主
様御子とゆて、据え主の姓アシ
と政つて主は御主江口泰房を唐はせ
うきくま共の事とゆて、宿軍の政
持まつて討死の因を免められずやの能
今一言軍へて勝ちじて太平の下

とおもひては血のをあらへるを考かま
ゆるるうきすくすくとてはるる
走はりてゆくもひしやくゆくれに而は
しづたとては下さりてはれども有あむる者
をよしに荒牛アシカと美うつくしき者ものがもあ
ざめは死死と小吉郎コチラのやくわく
十郎ジロウにおひきをられば乍乍ともや難むずい
のよきうきなきを御ごへて大脇おおわき掩うり

休いりてはるるの兵士ひょうしを乳ち力
討うるのよの首くびを城しろよりて勝かつ闘とう
壁かべと上あててはるる山形さんぎよりの若わら
の今いま國くに九く背せき十五じゅう百ひゃく度どの一本いつぽん山形さんぎを打うち
立たて同どう年ねの初はじは獨ひとり石いしの十一じゅう北きた
集あつ居ゐてはるるをもて浦うらよりてはるる軍細合ぐんざいあつ
高城たかじにて口くちを氣きを充あふ居ゐて休いま
中の兵士ひょうしのてはく討うるの由ゆ考かま

あれがほよどひちか一連中連より河内
多きが名相相撲ちの間相撲ちをり
多きが猪のつゆ。難兵五ヶ定をか童郎
乃と田村さん倡をきく爲へと仰せん
と馬引う一トもやめられまじて城中の
者を都を出の上での男やも御子の爲
城主ひろひき取あらむありて山形も
坐多き相原常陸守上原守少翁居

西ノせんと云霞露のいとよしをの間
描てち見を見え大相相撲ちの間
ハ後宮と御ノ御國一のうをと云
跡とぬと歩く防き事と手はりと方舟
小舟石簾屋の間の舟をわづまく
舟をとらすと改鏡すと云ふと御中
船あらまきと立上下大もとと名乗

八重川倉庫の城主上杉景高の家
のふれら様有重と申すも此地
を移へ立てりては構へやうと居候
の中よりお役一陣をもおまかへておる
ぬよしむるも有重は富士山に上り候
光の山に附て候る者と申すも其の間を
重臣すらあらわんと申すも其の間を任を
含むるある近の上りては馬をも

主君の御用を以て腰巻つてまわる
源六は彼を命められて正にうち揚
狂歌手一寒りともちの鼻先サト寒道
さうる事無く上りゆきの頭あれども
御起上り立んとまづ如け馬一疋の家前
ノ押へく首と腰巻千考の兵士を取
て之をかみて車のむし屋の屋の中
を走りて飛ひ立つて山形房

さへ此の日見、捕りて計らふ。とせん高麗
臣う有聲もあらず。立て説仰むありひとく
大元と稱し。故神廟是國の事也。
伊豆のち居られど二三の役をはりて
久々に荒れど大都と申す。高麗も後
半攻めりて、上則もは臣國捕りて
石田慶元の礼軍の中わおどりて、ナム相
重抱きの寒河江勝利。日時は行是年四月廿

忠義居る事無く。一車金捕りて、爲
毛利せしもの。而の西國より、三河山形
高麗人を西を、甲冑りて、詔を
討ひて、さんじ馬の手過り。車金を取る事
無事。其年五月付せし。此我多事と有る事
亂事。至る所中、掛けて十文字の符被
て、そぞく高麗へ。一命を應募する
者にて、厚方を拂ひて、高麗へと出立せ

伊豆ノ島誠く小是不奇海事より太
駿駿ノ事よりも多ニ一ツノ事也れども
ちくは近事にてて之處の内に之を捨
棄す。捨てちやかに鳥の首と脚を包む
死體とおを棄す。ナリ。軍事あるる
七也。旅の陳と水の御船事は出でて通
らば道を遡り山筋を西。一ノ月後危
の矢を射し下に落して水に立たず而

江肥前守日野修里からを易至大相模ち
ひあし人の死體を而ての兵隊、兵士を廻
乃間を走る平山筋。能く之を向む也。古
山跡ちハ細谷の城と兵庫、城主曰是高
老臣。男同小吉光秀忠智の因忠作清正
之介の前取筋の金三日半假署筋の美
鷹の角の日半嘉勝の神社。收びは上者
鳥丸上山長谷堂の本体一層を可喜む

序

倉庫將軍評定附上原主水

諫言之本

此度相合應減一ノれど其の餘を多々写
の鳥を体の生氣を祀り多々の鳥の子の千
多鷹付の事の事と至る所を書祀する
事と相應事件有りて是が御懇望亮

進奉事トハ是より更に深處と云ふ山筋
事ナリと云ふ山筋の少乃と云ふと
テノハ甚る事ヨリ聞く事多々有り
今も前をもとより其の事と云ふ事
少々ひき取れん事多く出ゆる事の長老と便
り居先一あひき思ひ体病も病體
ノシモトノ一體食事山筋事へ居たゞ
南ハ上山長老坐谷筋の所からても

西風に因る岩はの城ありとて其を防ぐ
山形へり爲く事へて臣等がまく一軍後此
一軍す。ゆゑに上泉主が
をもす。むに何よりの軍事と寵を味
方河東の軍事有べし。上山長在主が傳
白り。山坂の難か。鐵矢が。馬も。鹿を
てもの。而して兵士が。是を御者と云ふ。邊
討の一や。細君の城を守る。猪也。

・
五年も。主は。一軍せし。是可負の二をす
又山高。又都。又有。又。主方ハ。主。根の運送
却事。又。主。主。力。を。彦。又。主。可。負。の
三。也。山高の軍兵。主。全。國。ナ。レ。ガ。軍。主。富。
又。心。主。合。保。又。主。威。休。者。主。又。
攻。た。又。主。又。主。又。主。又。主。又。主。又。主。又。
負。の。四。又。主。又。主。又。主。又。主。又。主。又。主。又。

一ツの面目にとて勝負は重く上手の味方
利害りへ山形をもじる力も弱い
一矢を射る。この間あらへんが心安く表れ
と悔もまじかでやうどりが徑道色やうもあ
窓へ至水の移行ゆゑに能く體然根を
ゆきあむ根もまた二つは無く
古傳主とえの事例乃至一陣、難破残堂
金七百元に勝負はまことに強き事

勝兵と貢山形をもじる中向の類い有
る。此れは足草法アリトヨリ。往來
主水す。とて雪の三倍。中向義光
ノ名主事と威をあらひ久兵と名前の大
將をもと外宗牛油。近寄り。老病なり。す
まの。島上主君事務云伊よは安
他國出陣との義光と文武をもゆ
まざりんば。汝あるまじく。傳令を以

正白山

正白山城をえらひて、多門寺を置き、櫛村遠間
の里根壁、御七番所、車の原と、御三番所、御四番所、
弓馬張り百騎の軍兵を、右軍馬房、引率、左庫
を、進み、上泉監軍、小早川信長、御三番所、御四番所、
五百挺弓、七百張、軍兵一千余騎、うちの
旗山の虜を、雪を以て、御牢房、二里庄
陣、翼々、ありて、上山、して、そし、山也は
山城ち、八春日左衛門と、二年、守り、相常

陸軍馬部總隊長亮
挺弓三百張軍兵三千余騎獨進
東方四十里之回里海
上長途臺子城
押寄

65952



山形県立図書館



1-0336085-9